

財を積まざる可らず、財を積まんと欲するものは須からく儉なるべし。

古語に曰く、「金を集むるに巧みならんよりは、金を守るに約やかなれ」と、而して金を集むるは多く男子の事にして、金を守るは女子の職たり。然らば、主婦たらんものは能く、この理を明にして其任を全ふすべし。女子の任、亦重い哉。

(完)

貞一の日記 (拔萃) (明治卅六年五月卅一日男兒)

その母

明治三十七年十二月六日、父粥を食へさせんとしたるに、母に食へさせよとて、泣きてそりかへる十二月九日 貞ちゃん、いゝ子をして頂戴といへば、顔を撫でられる、また、父たわむれて、

貞一の手を、なむれば直に、父の衣服にすりつけて拭ふ、

十二月十二日 今日ばあやに負はれ、母に伴はれて小原先生の許に行く、此頃は、余程元氣もよく肥えて来た様に、思はるゝ故、体重もいくらか、増したるならんと樂しみて行きしに、案外にも、此前の時より減じたりとは、八、四七〇、〇先生は今少し食量を増せと命ぜらる。

粥 七分粥にして一晝夜に 凡そ一合四勺 魚肉 廿匁

野菜 百合ジャガイモ蕪菁 隠元豆を隔日

此頃貞一の能く知つて居る事は、耳、鼻、口、眼、ペロといへば、一寸舌の先を見せ、齒はとさけば口をがいめて、齒を少し見せる、イタイくはととへば、下の方を指し、ウンくと云ふ、これは 大便の出る時、余りかたくて痛か

りしよりなり、又人さし指と中指の股をさしては痛いといふ、コレハ此間、何かにて一寸傷けし事ありしよりいふなり。

十二月十八日 何時の間に覺えしか、猫の聲をきいて、ニヤン〜と云ふ、猫は何といふて鳴くのときけば、直にニヤン〜と答ふ。

十二月十九日 マンマは誰がこしらへるととへば、バーバ マンマはどこへ喰べるのときくと自分の口を指さす

十二月廿四日 此頃鼻々といつて、指にて鼻をつくことを 教へられ、鼻々といへば直に指を人の鼻に持ち來りてつく、また犬はワア〜といふ、これは ワン〜と教へしを、誤りていふなり、猫はときけばニヤ〜、犬はワア〜、真ちやんはと問へばマンマ〜と答へて、人を

笑はせる。

十二月廿七日 小原先生の許に行きて 体重を計

る、九、一五〇、〇あり、野菜は かぶ、大根、などよく 煮て極めて少しを興ふべしといはれたり、アツタといへば、火鉢に手をかざしてあたる、お羽織はときくと自分の羽織を、引張つて見せる。

十二月廿九日 眠る時の 兒守歌に、桃から生れた桃太郎を唱へば、喜び他の歌を唱へば、エ〜といつてやめさせる、上齒五枚になる。

明治卅八年一月一日 何のつもりかア、イ、といふ故、アイウエオのつもりにして、ウをいはずとすれば、プといふ、またワウ〜、ジヤイ〜などつゞけて云ふ、今日は元氣よく、火鉢を押して歩く、今迄一晝夜五回に食し居りし

を 五回の中一回を葛湯にす、毎日起きる時間によりて、遅速あれど、

朝六時 十時 二時 六時の定なり。

七時頃より十時まで眠り、其時に葛湯を飲まず、

一月四日 久しぶりにて又下痢し初め、今日は三回あり、原因は昨日隠元豆の分量多きに過ぎしならんか、野菜を廢す。

一月六日 今日は便通なし、元氣は相變らずよろし、此頃はウマ〜と、バア〜とを一所にし、て、ウマバーといふ、大抵食べたくなりて怒る時なり。

一月七日 下痢四回 父と小原先生の許に 行く途中、犬を見て ワ〜といふ、昨日は猫の走るを見てニヤン〜といひたり、漸く犬と猫の區別付きたる如し。

一月八日 正月休み中、家に歸り居りし 春さん

今日来る、余程嬉しき者と見へ、傍へよりては

抱けとせがみ、又自分の持てる密相の皮を、春さんに渡して、御機嫌とり、ア、イ、ブなどいふ。

一月十日 犬はと問へばワ〜、猫はと問へばニヤン〜、貞ちゃんと問へば、黙つて答へずなりぬ。

今日は父の學校 昨日旅順陥落の祝捷會ありし爲 臨時休業となりし故貞一を つれて 動物園に行く、象を見て、不思議相に眺め、鳥の數多集れる所を見ては喜ぶ。

一月十二日 便通は一回水分少くなる。父の白き毛の襟卷の、かゝれるを見付けて外に行かんとせがむ、何時でも湯に行く時貞一に巻きてやる故なり。

此頃貞一の能く云ふ事は、ワー／＼も全じ、表とい

つもつゞけること、ニヤ／＼も全じ、表とい

へば、あつか(燈火)何れも機嫌のよき時なり。

一月十三日 今夕も湯に行く時、三日月を、見て

仰向になり、アツカ／＼といひ、手を舉げて取

らんとす。

頭で押合といへば、眼を上へ向け、額越しに、

にらみながら、頭を動かして、父の頭に押しつ

ける様可笑し。

御醫者様へ行つて、何をもらふのと、聞けば、

必オツキ(お薬)と答ふ。

便通なし

一月十八日 湯に入る時、父の肩に手をかけてつ

かまり居るも、身軀を沈む際、こつち手々も

か入れといへば、直ぐに肩より外つして入れる。

便通一回 柔さを少量、

一月十九日 父汽車の出る真似とて、口笛を鳴ら

し、シユツ／＼といふ、父さんは何といひます

かと問へばシウ／＼と真似す。

便通三回

一月廿日 おもちやの達摩をとり、だるまさんの

眼はと問へば眼を指さす。

一月廿一日 ビヤノにて、コチロンの曲を、弾き

出せば、何時までも 弾けとて、他曲に移るを

許さず、後父口笛にて、其曲を、唱へば、直ち

にエー／＼といつて、ビヤノの方を指さす、

二三日前までは 父汽車の真似とて チンゴ

／＼といへば自分も真似する、つもりにて

唯アア／＼と云ふのみなりしが、今夕はグー

／＼といふ、電車 とさけば シツシツと云ふ、

瀛車とまちがへたるなり、  
醫師の許に行き体重を計る増減なし。

### 辻占のおかし

於東京盲啞學校 平 岩 學 洋

諸君、私わ辻占と朧かしの關係について、一言お話し致したいと思ひます、一体わの辻占と云うものわ、何のためにできてゐるのでありましょーか、特に、南京豆の中にいれたり、又種々のおかしの中にいれてゐるものわ、いかなる目的を以て、製造したのでありましょーか、つまりは人を慰め樂ましめて、一の興を興えるためで有りましょーか。然らば、此の興味をそへたといふ者は、主として、誰のためにできたのでありましょーか、大人のためでありましょーか、又子供のためでありま

しよーか、或わ誰彼の別なく、只一つの習慣的に、入てゐるのでありましょーか、とにかく、これわ一つの研究問題であると思ひます。

先夫は夫として其のつぢうらには、いかなるものが書てゐるかと研究して見ますと、一つとして、碌な事わ書てないのであります、實に有害な物許りでありまして、子供にわ、聞かするもいましき事許りで、常に私わ、残念に思うて居るのであります。これは今少し注意して、風俗上社會上、少しも差支はない様な物を書て貰ひたいのである。よし夫迄、行かなくとも其辻占の意味わ、今まで通りとしても、言いまわしを上手にして貰ひたいである。

そこで、此辻うらが子供のために出来てゐると致しますれば、實に、驚嘆の至りである、危険千